

## 「死の力に打ち勝つには」ヨハネ11:17-44 11/3/20 Jackson日本語教会

私たちは死の力に囲まれている。もし先々週この言葉を発したならば、私も含めて、いったいどれほどの人が、それを真剣に考えることが出来たのでしょうか。しかし、今同じ言葉を聞くとき、私たちは、この言葉と真剣に向き合わざるを得なくなりました。こちらでは3月11日未明になります。現地時間では（2010年）3月11日昼14時46分、日本を、日本史の上では最大、世界の記録の中でも5本指に入ると言われる大地震が襲い、特に津波で何十万に達する人々が罹災し、現在福島にある原子力発電所は改善は見られますがなお支障をきたし、人災という面も大きくクローズアップされてきています。

私の母教会の関係者では、現在までのところ、二人が罹災したことを聞きました。一人は仙台で、築一カ月の家を流されてしまった。逃げるときに、あ、財布、と思ったけれども、とにかく逃げた。もしあれを取りに言っていたら、確実に死んでいた。その人は今実家に子どもと身を寄せています。もう一人は、福島でした。郡山に住んでいたと聞いていましたが、近頃旦那さんの転勤で海辺の方へ引っ越して、これも築一カ月の新居を流され、どこかのビルの上の階から、泣きながら私の父に電話をしてきたそうです。

仙台と福島の方に3つ、青森県三沢に一つ、東北太平洋側に私たちの団体は教会があります。今週は特に冷えた一週間だったそうです。氷点下。今日はそうでもないらしいですが今週頭、また寒気が入ってくるということです。私たち、特に罹災者と関係のある人たちにとっては、何かしたくても何もできない。流通がダウンし、食糧はもちろんですが、燃料の供給が絶えてしまった。タンクにあるだけ。その燃料が目の前で着実に減っていく。病院などは、まさしく燃料のゲージが命のゲージになっているはずです。そういう状況がネット社会ですから、もしかしたら罹災者以上によくわかる状況にあるのに、私たちはアメリカにいる。地球の反対側にいる。ただ死の帳が愛する人々にゆっくりと下りてくるのをほぞをかんでみているだけという状況にある、そういう一週間だったのではないのでしょうか。

国際的な支援は今回、群を抜いています。アメリカは空母まで出しました。本当にありがたい。自衛隊は瞬間的とでも言えるような速さで一万人を遙かに超える人々を津波の瓦礫の中から救い出しました。なのに、なお見当もつかない人々が今もって行方不明です。石巻では学校のグラウンドに避難して…越しているときに津波にあって、児童の8割以上が行方不明になっているということでした。救護所で、助かったのにもかかわらず、一人の方が心筋梗塞で命を失った方がいた。これからそういうケースはなお増えるようだ。いろいろ理由は挙げられていましたが、救護所というのは安心できる場所のはずなのに、助かるところのはずなのに、そのところで命を失う。そんなことがあっていいのかということが、そこかしこで起きている。ある人が言っていました。「何十年も前の津波を聞いていて、3階だったら大丈夫だろうと思っていた。」しかし今回の津波は局所的には15メートルを記録した。津波とは、瞬時に海面が15メートルだったら15メートル上昇して、私たちを新幹線並みの早さで襲う代物です。「3階でも駄目でしたね。」ポツリ言ったその人の言葉に、無力感、人間はなんと小さいのだろうと感ずるのは私だけではないでしょう。

その私たちにとり、このマルタの21節からの言葉は、本当に私たちの言葉そのものではないのでしょうか。主よ、もしあなたが、もしあなたがここにいてくださったならば、私の兄弟は死ななかつたでしょう。」そして次の言葉も、その次のイエス様の言葉も、教会に集う一人ひとりにとって、誠にスムーズに口に出てくる言葉、いい交わす言葉ではないのでしょうか。「しかし、あなたがどんなことをお願いになっても、神はかなえてくださることを、私は今でも存じています。」「あなたの兄弟はよみがえる。」「終わりの日のよみがえりの時よみがえることは、知っています。」

主は、「良し、よろしい」とは言われぬ。彼女の信じていることがらについて明らかに、修正をせまられた。「私はよみがえりであり、命である。私を信じる者は、たとえ、死んでも生きる。また、生きていて、私を信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか。」まるで気おされたかのように、マルタはハイと答えます。彼女だけではない。私たちに向けて、強く言えば、クリスチャン一人ひとりに向けて、今までの考えを変更することを迫っておられます。命と、死、について、この地上の常識を覆すことを迫っておられます。

主は墓に行かれる。愛するラザロが、死んだそのむくろが置いてある洞穴の、岩でふさがれた前に行く。死とは何か。死の力とは何か。…先の大震災の被害で、非常に印象に残った記事がありました。

毎日新聞 3月14日(月)20時31分配信 津波で壊滅的な被害を受けた岩手県宮古市田老で14日、倒壊した家屋の中から祖母と孫で3歳の男の子の遺体が発見された。現地入りした記者は、その様子を見ていた。倒壊した家屋は津波に押し流され、元の場所から数百メートル離れた場所で見つかった。線路が上にあった。家族や親類らは午前中から、がれきの撤去を始めたという。ブルドーザーや手作業で柱などを一つ一つ取り除いていった。電動ノコギリを使って、流れついた街路樹なども切った。2人が発見されたのは午後2時を過ぎてからだった。折り重なるように倒れており、祖母が孫を両手で抱きかかえていた。その瞬間、撤去作業の様子を食い入るように見つめていた男児の母親(20代)はその場に崩れ落ち、家族や親類らと抱き合っただけで号泣し続けた。母親は「おばあちゃんは私が仕事の時、いつも息子の面倒を見てくれていた。2人が一緒に見つかって本当に良かった」と涙をぬぐい「でもやっぱり死に顔を見ることが出来なかった。まだ生きてると信じている自分がいるから」と声を詰まらせた。

もうひとつ。

大震災発生から5日目の15日、遺体で見つかった浜田勝太郎さん(79)は、大切そうに胸にアルバムを抱いていた。縦約40センチ、横30センチの冊子の中には、ベビー服姿の孫をうれしそうに抱き上げるスナップ写真などが貼り付けられていた。救助された妻によると、津波が自宅を襲った時、浜田さんも一緒に2階に逃げた。だが家族のアルバムを取りに1階に戻り、そのまま逃げ遅れたという。消防の捜索に立ち会った息子さん(48)は「本当に孫が好きだった。だけど、ばかなおやじです」と声を震わせた。

聖書が言う死の力とは何であるのか。これだ。いくら愛していようと、全く何も顧みるべきものはないかのように、いくら愛するその子そのものように護ろうとしても、命を捨てて守ろうとしても、その根本から根こそぎ飲みつくしてしまう、私たちに無力、虚無、絶望、破滅しか与えない憎むべき敵、それが死の力です。なんでこんなものが私たちには併存しているのか、私たちをさいなむのか。私たちの罪がそれを許してしまったのだ。私たち自身が神から離れて行っちゃうもんだから、それを許してしまったのだ。様々な有名人、果ては高名な牧師まで、これは天罰だと言う輩が出始めています。こういった方々は、自分もその天罰である死からまぬかれえないのを忘れていたからそう言えるのです。私たちはまるで心臓を死の力に握られながら生活しているようなものではないですか。いついかなる時でも思う時に思うがままに握りつぶされ、いくら生きようと脈を強く打っても、それを力づくで押さえつけられてしまう。主がラザロの墓の前で直面したのがこの死の力とその結果でありました。

途中マルタの妹マリヤにもあった。彼女も、その係累も一緒に、泣きながらついてきた。大の大人が、何人も、何十人も、悲嘆にくれて泣いているそれをご覧になられて主イエスは激しく感動された。他の翻訳ですと憤りとか、霊の憤りと訳されています。英語ですと、groanという言葉が用いられていました。かなり訳しにくい言葉です。深く悲嘆で揺り動かされたという言葉です。心を揺さぶられて、主が、涙を流された。周りの人たちは言った。「嗚呼、なんとラザロを愛しておられたことだろう。」彼らも明らかにイエスの心の深さが分かっていません。この世ならではの見方でしかイエスを見ていません。ここで主が立ち向かっておられたのは、死の力そのものと、その結果です。それになすすべなくなぎ倒されて行く私たちの悲惨です。それを「彼は故人をなんと愛していたことだろう」、「死は、仕方のないことだ」と言ってお茶を濁すしか術を知らないのが私たちの現実です。自分で犯した罪を、その結果を、自分で解決できなくて、なすすべなく、もはや運命として受容している、主が愛する人たちの姿です。

しかし、主にあって、死は当然のことではない。あきらめるべき類ではない。最初この世界が創造されたとき、死は人を縛ってはいなかった。そのことを、他の人はいざ知らず、マルタは知っている。マリヤも知っている。話としては知っていた。のに、心が伴わない、期待していない。あまりにも具体的に突きつけられた現実に、期待を粉々に打ち砕かれている。主の涙には、そういう人々への涙、私たちへの慟哭も、混ざっているのではないだろうか。

人々は言いました。「あの盲人の目を開けたこの人でもラザロを死なせないようにはできなかったのか」この言葉は、ですから、イエス様の側からみれば、全く趣を異にしていたはずで

「いったい誰がそんなことを決めたのか」「いったいなぜそういうところに、甘んじているのか」「お前は評論家か」「あなた自身の問題なんだぞ」私だったら他にどんな言葉が出てくるかなあと考える。だけど彼らのさらなる絶望を受け取った主の関心はギャラリーには向かない。問題の核心へ、まっすぐに突入する。『石をとりのけよ』「主よ、もう臭くなっています。四日目なんですよ。」「…もし信じるなら、神の栄光を見るとあなたに言ったではないか！」人々が石をのけて、そして主は祈られた。天の父に感謝をささげ、大声で言われた。「ラザロよ、出てきなさい」。すると、死人は手足を布でまかれ、顔も顔おおいで包まれたまま、出てきた。イエスは人々に言われた。「彼をほどこいてやって、帰らせなさい」。このあとの人々の驚きと喜びがどれほど大きかったこと想像に難くありません。このあとの個所を見ますと、余りの衝撃の故に、ユダヤ社会の支配層は、彼をのぞかなければ大変なことになるとして、イエスを暗殺を最終的に決定しました。ここで私がイエス様に驚くのは、既にユダヤ人のこの反応まで見越して、このラザロのよみがえりの御業を主がなされていた点です。ご自身の命に危険が及ぶということを察知してなおこのことを行ったことです。彼らは、イエスを取り除こうとして、暗殺の画策をした。ラザロの件が起きたからです。そしてそれは成功した、ように見えた。しかしその瞬間に現出したのは、神の、信じる者を救う十字架の救いの御業だったのです。イエスは十字架で死の力を一手にわが身にひきうけられ、彼を信ずる者に罪の力を及ばないようにしてくださいました。イエスは言われました。「もし信じるなら、神の栄光を見ると言ったではないか。(40)」神の栄光とは十字架と復活による救いの御業です。ラザロのよみがえり、人々が本当に驚いたあのニュースは、実はその予兆にしかすぎません。なぜ主はあえて予兆を私たちに与えてくださったのか。「終わりの日に甦ることは…」、と言ったマルタの言葉は、一方での真実です。終わりの日には、甦りは起きる。なのになぜ主はあえて今この時よみがえりの御業の先鞭を見せてくださったのか。主が、彼ら不信仰な信仰者たちを慰めたいと思われたからです。目に見える形で将来の事実を見せてあげたいと願われたからです。それを父なる神は良いことだとしてくださった。41節からの主の祈りは、将にそのことなのです。

私たちを取り巻く状況は容易ではない。ハイチの災害も今なお同時並行です。中東の不安定さもガソリンの値段を見れば明らかです。しかも私たちは日本から距離があるだけ、何が出来るか分からないと言う無力さも感じる要因となりえます。陽菜さんのお父さんが大船渡の市役所に勤めていると伺って、なんとも言えない思いになりました。先日、救援物資(relief aid)と称して一個、クローガーで安売りしていたのを買い集めて送ってみました。焼け石に水なのは重々承知ですけど、やって見ました。お金の方がいいのかなあと葛藤しながら送りました。それがどういう結果を生むのかなど、もちろんわかりません。そういう中に私たちはいる。無力感、将来の不安の中に私たちはいる。そういう私たちに向かって、主は言われます。「もし信じるなら、神の栄光を見るとあなたに言ったではないか。今まで言ってきたではないか。」

先日、もう召されましたピケンズ教会のバーバラさんの病室をお見舞いしたときに、昨年秋にこの地方を襲ったトルネードの被害者の方がおられて、お見舞いがてら、世間話的に、その時のことをお話して下さっていまして、それを伺いました。トルネードの一瞬で、彼女は全てを失ったそうです。教会自体も瞬時に壊されたらしい。ところが、言うのです。神は本当に素晴らしい。私は全てを失ったのだが、みんなが本当に様々な物資の援助、精神の助けを施してくれた。何もなくなっただけで、足りないものが無くなっていたのよ。満たされているのよ。これを経験したことは、本当に私にとって良いことだったと思うわ。本当に神様は素晴らしい、そう締めくくっておられました。バーバラさんのその病室は、これから死を迎えるはずの場所だったのです。ところが、本当に光りが差したように感じました。神の栄光が死が支配しているはずの部屋をめぐりてらし慰めを与えたようでした。本当に、イエス様に命があると言うことの具体的な姿を見た思いでした。そういう時を過ごしたことを、今私は思い返しているのです。

被災地の人々に限らず、多くの日本の人々が、この大事を通して、死の力を正しく見つけ、それに打ち勝つイエスの救いを見上げることを願います。イエスを救い主と信じることを願います。死に打ち勝つ力は私たちにはないからです。しかしイエス様にはある。彼だけは持っている。その主イエスが言われます。「もし信じるなら、神の栄光を見るとあなたに言ったではないか。」私たちだけではない、彼らも、もし信じるなら神の栄光を見れます。あの悲惨の中ですら神の栄光を見ることが出来ます。死の力に打ち勝てるのです。そのために、私ども、祈りつつ、なにがしかの行動を始めましょう。続けてまいりましょう。主の栄光を祈りつつ求めて一步を踏み出していきまし

よう。